

読書推進運動

公益社団法人
読書推進運動協議会
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-32
出版クラブビル6階
TEL 03(5244)5270
FAX 03(5244)5271
発行人 佐々木 泰
編集人 片岡 伸子
定価 60円
会員の購読料は
会費の中に含まれる

No.677 ★クラウドファンディングご協力のお願(2頁)
★「読書週間」ポスターイラスト募集(8頁)



「子どもの読書週間」によせて いわさきちひろ没後50年を考える

ちひろ美術館常任顧問 横浜美術大学客員教授
絵本評論家・作家

まつもと たけし
松本 猛

「子どもの読書週間」によせて

認知されるようになってきました。

母であるいわさきちひろが

世を去ったのはベトナム戦争

が終わる1年前の1974年

のことでした。その前年、ち

ひろの最後の絵本になった

『戦火のなかの子どもたち』

(岩崎書店)が出版されます。

同じ年に絵本『猫は生きてい

る』(早乙女勝元・文/田島

征三・絵 理論社)も出版さ

れます。どちらもベトナム戦

争のさなか、米軍の無差別爆

撃などによって、なんの罪も

ない子どもたちが犠牲になる

ことに対して、戦争の悲惨さ

や悲しさを描き、平和の大切

さを語らねば、という強い意

思をもって制作された絵本で

した。今なお、ウクライナや

ガザでたくさんの子どもたち

が亡くなっています。残念な

ことに、この50年の間、紛争

は世界各地で絶え間なく起

り、子どもたちは犠牲になり

続けています。

絵本が、戦争をはじめ、社

会的テーマを本格的に取り上

げるようになった嚆矢が、実

はこの2冊の絵本でした。絵

本は、子どもたちの成長と喜

びのためのもの、というかつ

ての考えから、現在では平和

をテーマにした絵本をはじめ

め、人権・差別、自然・地球

環境、多文化共生、老いと死、

原発など、以前は考えられな

かった社会的テーマの絵本が

続々と出版されています。「絵

本でも社会的テーマを語らね

ばならない」「絵本ならではの

表現ができる」と考えた

作家や編集者の努力もあり、

1970年代、1980年代

から絵本の多様化が始まりま

す。絵本も少しずつではあり

ますが、ようやく映画やマン

ガと同じように、ひとつの表

現ジャンルとして認識されつ

つあります。

50年前、私はちひろの遺作

展をどこかの美術館で開催し

たいと奔走したのですが、当

時の美術界では絵本画家の作

品は芸術作品とは認識されて

おらず、すべての美術館で門

前払いにありました。いわさ

きちひろ絵本美術館(現・ち

ひろ美術館)の設立を決意し

た理由のひとつはそこにあり

ました。今では30近い絵本専

門美術館が生まれ、多くの公

立美術館でも絵本原画展が当

たり前のように開催されるよ

うになりました。絵本はテー

マの拡大とともに、美術表現

のジャンルとしても社会的に

認識されるようになってきま

した。

いわさきちひろという人は、

子どもの幸せと平和という

テーマで作品を作り続けると

同時に、絵本は芸術だと考え

て絵本表現を追求した作家で

した。その意志は多くの絵本

関係者に引き継がれています。

ちひろ美術館(chihiro.

jp)は没後50年の今年、ちひ

ろの願いと仕事を現代に生

かすために、「あれこれ

のち」(東京3月1日〜6月

16日、安曇野9月7日〜12月

1日)、「あ・そ・ぼ」(安曇

野3月1日〜6月2日、東京

6月22日〜10月6日)、「みん

なななまよ」(安曇野6月8

日〜9月1日、東京10月12日

〜2025年1月31日)とい

う3つの特別展を企画しまし

た。インタラクティブ・アー

トで注目されている placax

をディレクターに迎え、保全

生態学、発達心理学、インク

ループデザイン等の専門家の

協力を得て、これまでにない

新しい展示会の創造に取り組

んでいます。

「読書週間」「こどもの読書週間」を
応援してください!



読書推進運動協議会は クラウドファンディング を実施します

今年も「こどもの読書週間」の
シーズンむかえます。

私たち読書推進運動協議会は、
ザ・キャビンカンパニーさんのオ
リジナルポスターを5万枚以上作
成し、配布いたしました。ポスター
は全国で掲出され、読書の魅力を
伝えていきます。また、全国の読書
運動協議会さまに、「こどもの読
書週間」行事補助金をお送りいた
しました。

私たちは「こどもの読書週間」
「読書週間」を長きにわたって主
催してまいりました。運営には多
額の費用がかかりますが、その原
資は出版、図書にかかわる会社さ
まや団体さまからの会費収入で

す。残念ながら会員数はすこしずつ
つですが減少傾向にあり、反面
昨今のインフレ傾向により制作物
の製造コストや各種経費は増加、
結果として法人としては慢性的な
赤字状況となっております。ちなみ
に2023年度の決算は750万円程
度の赤字となりそうです。

このままでは「こどもの読書週
間」「読書週間」を主催し、継続
的に運動を推進するのが難しくな
るという危機感を抱くにいたり、
今回クラウドファンディングを実
施することいたしました。左記
にアクセスいただいで、ぜひ「こ
どもの読書週間」の未来のための
寄付をいただきたいと願ひ申しあ
げます。

- サイトオープン予定
2024年4月20日(土)
(5月24日(金)終了予定)
- クラウドファンディングページ
[https://camp-fire.jp/projects/
view/750728](https://camp-fire.jp/projects/view/750728)
- (当会ホームページからもリンク
予定)



クラウドファン
ディングQR
コード

■「上野の森親子ブックフェスタ2024」開催へ

今年も2日間、上野の森で 子どもの本とイベントを楽しむ!

5月4日(土)〜5日(日)、東京都台
東区の上野恩賜公園で、「上野の
森親子ブックフェスタ2024」
(主催)子どもの読書推進会議/
日本児童図書出版協会/一般財団
法人出版文化産業振興財団)が
開催される。

昨年、従来の3日間を2日間
開催に変更した。はじめての試
みであったが、結果的にのべ
2万6300人が来場、書籍の売
場

り上げも3150万円に上り、と
もに3日間開催の2022年を上
回った。

催事のメインである謝恩価格で
の児童書販売「子どもブックフェ
スティバル」には、今年もすでに
60社・者を超える出展が予定され
ている。各ブースではそれぞれの
版元がみずから厳選したライ
ナップを販売する。
会場のオペレーションでは今年

■「2024えほん50」最新版発表

ぜひ読んでほしい、新刊絵本を 紹介

公益社団法人全国学校図書館
協議会(全国SLA)は、推薦絵
本リスト「2024 えほん50」
全国SLA絵本委員会選定(協力
)子どもの読書推進会議)を発
表した。

このリストは、2019年から
毎年選定、発表されている。今回
は2023年の1月から12月まで
に刊行された絵本より、全国SL
A絵本委員会が「ぜひ子どもたち

に読んでほしい」と、テーマ、ジャ
ンル、程度さまさまな観点から推
薦する50冊が厳選されている。
リストはPDFとエクセル形式
のファイルが用意されており、全
国SLAのホームページからタウ
ンロードが可能。絵本ごとに目安
となる対象学年も記載されてい
る。また、推薦絵本の書影と内容
紹介が入ったリーフレットのPD
Fもダウンロードできる。



「全国訪問おはなし隊」
キャラバンカー

も分散レジ方式を継続し、キャッ
スレス決済のみとし、図書カード、
QRコード決済に加えて交通系I
Cも使えるようにするなど、非接
触の徹底と混雑緩和をすすめる。
販売される書籍の作家サイン会
や、講談社の「全国訪問おはなし
隊in上野公園」など、今回も盛り
だくさんのお楽しみが予定されて
いる。

また、全国SLAでは、この
「2024 えほん50」より、1年
間を代表するところに優れた絵本と
して、「第29回 日本絵本賞 最終
候補絵本」30点をノミネート。こ
ちらのリストも公開している。

●全国SLAホームページ 「2024えほん50」紹介ペー ジ

[https://www.j-sla.or.jp/
recommend/ehon50.html](https://www.j-sla.or.jp/recommend/ehon50.html)
・第29回 日本絵本賞 最終候補絵
本のページ
[https://www.j-sla.or.jp/
contest/ehon/28-2.html](https://www.j-sla.or.jp/contest/ehon/28-2.html)

■いわさきちひろ没後50年 展覧会

生態学、発達心理学からも ちひろの絵にアプローチ

巻頭で松本猛さんに紹介いただいた、展覧会「いわさきちひろ ぼつご50ねん こどものみなさまへ」は、現在、東京館で「あれこれのち、安曇野館で「あそぼ」が開催されている。

いわさきちひろの絵を「あそび」「自然」「平和」の3つのテーマで、それぞれ、発達心理学、生態学、システム工学の研究者の協力も受けて、読み解いていく展覧

会となっている。展覧会ディレクターを務めたのは、鑑賞者参加型の展覧会の構成や演出で活躍中のTAKASAKI(近森基十小原藍)。

自然をテーマとした「あれこれのち」では、ちひろの住まい(現 東京館) 近辺の草花や生きものを取りあげる。企画協力の鷺谷いづみさん(保全生態学/東京大学名誉教授)は、「ちひろの絵を見て、50年前の日本では自然

との共生ができていたと知った。そのすばらしさ、楽しさを目と心で把握できる展覧会になるといいな」と語った。

また、ちひろの絵から「むらさき」をピックアップしたコーナーでは、染料としてのむらさき、『万葉集』に登場するむらさきなど、科学、心理、文学など多方面から紹介する。

会場にはさわるだけで楽しいスクリーン、草や葉を使って遊べるコーナーなども用意されている。松本猛さんは、「人がそこにいて幸せになれる、そんな美術館展覧会としたい」と語っている。

■東京子ども図書館 新刊情報

松岡享子さんの著作を リニューアルして復刊

公益財団法人 東京子ども図書館は、昨年12月に「レクチャーブックス◆松岡享子の本」『お話について』を発行した。

同書は、1996年に発行した「松岡享子レクチャー・ブックス1」『お話について』のシリーズ名と一部表記をあらため、装幀を一新した。1984年に東京子ども図書館設立10周年記念事業として行った、同館理事長(当

時)松岡享子さんのふたつの講演録「お話について」「お話のたのしみを子どもたちに」が収録されている。

このシリーズは、2巻目『ことばの贈りもの』も好評発売中で、現在3巻目を編集。同書の購入は、書店または東京子ども図書館ホームページで可能となっている。

また、東京子ども図書館は今年、



『お話について』
新版表紙

財団設立50周年を迎える。記念冊子・グッズの製作や、おはなしの普及に焦点をあてた映像の製作・上映会など、さまざまな企画が予定されている。記念企画は詳細が決まりしだい、順次ホームページに掲載される。

●東京子ども図書館ホームページ
<https://www.tcl.or.jp/>

■JBBYが連続講座を開催

日本の国際アンデルセン賞作家の 世界をじっくり味わう

一般社団法人 日本国際児童図書評議会(JBBY)は、毎年開催している「JBBY 国際アンデルセン賞と世界の子どもの本講座」を、本年度は創立50周年を記念し、「50周年連続講座『日本の国際アンデルセン賞受賞作家たち』」として行くと発表した。

講座は全5回。各回ごとに、これまで「国際アンデルセン賞」を受賞した日本の作家・画家をひとりずつ、詳しく紹介していく。毎回、対面とオンラインのハイブリッドで実施する。対面の会場は、出版クラブビル(東京都千代田区)。

- 第1回 5月18日(土)
「時代の寵児 安野光雅の世界」美術館の仕事から学んだ安野本の面白さ」講師 廣石修さん(元安野光雅美術館副館長)
- 第2回 6月8日(土)
「まじさん、まじしてる」講師 市河紀子さん(フリーランス編集者)
- 第3回 7月21日(日)
「絵本画家 赤羽末吉の誕生とその頃」講師 赤羽茂乃さん(赤羽末吉研究者) / 荒川薫さん(元福音館書店編集者)
- 第4回 9月14日(土)
「世界のしらべ 物語の灯り」講師 上橋菜穂子さん(作家)
- 第5回 10月5日(土)
「物語は水平線をこえて」講師 角野栄子さん(作家)

対面・オンラインともに、参加には参加費と事前申し込みが必要(二講座ずつ申し込む)。申し込み方法は決まり次第、順次、JBBYホームページに掲載される。

●JBBYホームページ
<https://jbbj.org/>



2018年に作家賞を受賞した
角野栄子さん

■伊藤忠記念財団「子ども文庫助成事業 贈呈式」

子どもと本をつなぐ場の あたたかさをこれからも

公益財団法人伊藤忠記念財団は3月4日(月)、東京都港区の伊藤忠商事東京本社ビルにて「2023年度子ども文庫助成事業 贈呈式」を開催した。

同財団の鈴木善久理事長は、子ども・青少年の環境が厳しいとして、「みなさんの活動はこれからの世代にとっても重要な活動です」とあいさつを述べた。

選考委員長の石井光恵さんは、子ども食堂や放課後の居場所づくり団体からの応募が昨年に続き目立ったこと、バリアフリー図書製作ボランティアでは、対象となる

子どもの個性にあわせる工夫が見られたと報告。「(コロナで)人と人が直接関わる活動の継続には大きな困難があったが、その経験を糧に前進をしていきたい」と締めくくった。

受領者あいさつは、篠栗おはなし会(福岡県篠栗町)の一柳より子さん。お子さんが小学生のころ、担任の先生が「うちの本を見て、勧めてくれたのがきっかけ」で活動を始め、現在は4つの小学校の年間計画に組みこまれていると紹介。「私たちに、子どもたちに、

たくさんの夢と希望を、文化を与えてくれる助成」と感謝した。京都府立南山城支援学校(京都府精華町)の下野恵子さんは、「全国的に特別支援学校の生徒数が急増しており、学校図書館が普通教室に転用されることもある。特支の子どもたちへは、本へのアクセス環境を整えることが必要で、その環境は地域の幼い子・高齢者にも有効と考えています」と述べた。

功労賞受賞のてんとうむし文庫(静岡県三島市)の段千恵子さんは、

「今年で30周年。コロナで『宿題が終わったら文庫で待ち合わせ』という子どもがいなくなつた。また待ち合わせ場所にしてほしい」と述べた。もうひとりの功労賞受賞者 青山台文庫(大阪府吹田市)の正置友子さんは、研究者としても活躍。50年の文庫の歩みとして活躍。50年の文庫の歩みとして活躍。50年の文庫の歩みとして活躍。

元選考委員長の汐崎順子さんは、東日本大震災時の文庫ネットワークを紹介、「ひとりひとりの子どもに着目し、柔軟な対応ができるのは文庫とエールを贈った。贈呈式後は2019年以來となる懇親会も開催され、受領者たちは交流を深めた。



「読書は文化、文化は社会の土壌、それを育てるのは文庫」と語る正置友子さん

■日本ペンクラブ「読みたいラジオ」

インタビュアーと作家本人による 朗読を毎週配信!

一般社団法人日本ペンクラブの「子ども本」委員会は、現在、作家・翻訳家が自作を朗読し作品について語るラジオ番組「読みたいラジオ」を、音源配信プラットフォーム sound.in で配信している。

「子ども本」委員会は、作家・翻訳家・画家・ミュージシャン・装幀家・編集者など、子ども本の作りに関わるメンバーで構成されており、現在は翻訳家の河野万里子さんが委員長を務めている。「読みたいラジオ」は、読書の楽しさや豊かさを伝えるきっかけとして、企画された。

番組は、「青い鳥文庫」(講談社)元編集長の高島恒雄さんが進行役となり、本の作り手にインタビュー。自作の朗読を交え、その一冊にこめた思いや創作の裏話を紹介する。毎週金曜日17時に新しい番組が配信される。

現在のラインナップは、森絵都さん「カラフル」(文春文庫/講談社)、那須田淳さん「巨壳空ロック」(あすなろ書房/ポプラ文庫ビュ

アフル)、河野万里子さん「星の王子さま」(新潮文庫)、あさのあつきさん「バッテリー」(教育画劇/角川文庫)、野坂悦子さん「フランダースの犬」(岩波少年文庫)、長野ヒデ子さん「おかあさんがおかあさんになった日」(童心社)、寮美千子さん「第1詩集 空が青いから白を選んだのです 奈良少年刑務所詩集」(新潮文庫)など。配信サイトの該当ページへは、日本ペンクラブホームページよりアクセスが可能。

●日本ペンクラブホームページ

<https://japanpen.or.jp/>



【左】「読みたいラジオ」のアイコン(絵: いしいつとむ)
【右】「読みたいラジオ」QRコード



優良読書グループの歩み (4)

2023年度の「読書週間」に際して道府県読書推進運動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。
(順不同)

ファミリー文庫 「ら・みるく」

代表者 林王 直美
福島県伊達郡柔折町
福島県立図書館
〈推薦〉

約30年前、当時各地区の公民館で「ママさん教室」が行われ、同年代のお母さん方の交流の場となっていました。

そこで知りあつたお母さん方と意気投合し、県の助成事業「おひざにだっこのおはなし会」に参加。2年間の補助事業でしたが、これで解散してしまうのはもったいない、と有志6名で、読み聞かせ団体「ら・みるく」を立ち上げました。設立当時は、絵本の読み聞かせにかぎらず、劇にも力を入れていました。毎週1回、児童館に集まり、衣装や小道具をみんなで行って、衣装や小道具をみんなで行って、わい手作りしながら、『3匹のこぶた』や『桃太郎』などの劇に挑戦。劇中飛んだり跳ねたり、動きを

多く取り入れようと心がけると、「ら・みるく」のドタバタ劇がおもしろい」と町内外で話題に。

隣町の婦人会や高齢者施設からも声がかかり、「見ていて楽しい」「主役の子がかわいかった」と、思いがけず「おひねり」をいただいたことも。多くの方に喜んでいただけたことがとてもうれしく、もっとと楽しんでもらいたい——と活動の糧になっていました。

この30年間で、メンバーの立場もそれぞれ変わっていききました。子育てが落ち着いて、仕事に復帰した人、親や夫の介護に追われるようになった人、そして、自分自身も年齢を重ね、体調に心配が出てきました。ひとり、またひとりとな数が減っていき、一時は2名で活動していた時期もありました。

それでも、「仕事、家庭を最優先しよう」というモットーは崩さず、忙しいときは休んでいいよとたがいに声を掛けあつてきたことが、無理なく、細く長く続く活動

体を大きく使って子どもたちを楽しませる



動を続けられた理由なのかなと思

います。自分の身の回りに余裕があれば顔を出す。そのくらいがちょうどいいのかもしれない。自分たちも同世代、子どもたちも同年代、いろんな悩みを共有しあつた、気心知れたメンバーだからこそ、協力しあつて、ここまで継続することができました。これから、絵本の読み聞かせを始める方に伝えたいのは、「絵本を侮らないでいただきたい」ということです。

絵本は、短い文章の中で、起承転結がまとまつていて、伝えたいことが心にスッと入つてくる。大人が読んでも、感動することが多々あります。現代を生ききるお母

オレンジママ

代表者 佐藤 佳世
岐阜県加茂郡坂祝町
岐阜県読書推進運動協議会
〈推薦〉

「中央公民館図書室で子どもたちに定期的な読み聞かせをしてあげたい」という図書室担当の思いと、「小学校の授業で地域の方に読み聞かせをしてもらえるといいな」という学校司書の願いをかなえるため、町内で活動していた読書サークルと新しく小学校に上る子をもつお母さんたちに声をかけて、1998年に読み聞かせサークル「オレンジママ」が発足しました。そのときのメンバーは、小学生の保護者を中心で15名。現在は幼児を抱えるお母さんや高校

さん方は、仕事と家庭の両立で、とても忙しいと思います。それでも、少しの時間でもいいから、本を手に取り、お子さんと読書の時間を大切にしたいです。今年度をもって、団体としての活動に終止符を打ちますが、これからも身近なところで、本の大切さを伝え続けていきたいと思

生の子がいるお母さん、またお孫さんがいる高齢の方まで、幅広い年齢層の12名で活動しています。これまでの26年間、「子どもたちに本を読んであげたい、読書の楽しさを知ってもらいたい、本好きの子どもになってほしい」という願いをもつて活動を続けています。サークル名の「オレンジママ」には、「明るくあたたかく元気なお母さんたちの活動しよう」という願いがこめられています。当初は、小学校の昼休みに教室を借りてスタートしましたが、現在では、朝読書や小学校図書館での授業へと、場所や方法を変えながら続けています。子どもたちは、「オレンジママ」の表情豊かで情



本を通して子どもたちと過ごす時間が楽しみ

感あふれる読み聞かせに引きこまれ、キラキラ目を輝かせ、夢中になつて身を乗り出しながら聞いてくれます。そうした子どもたちの姿は、私たちにワクワク・ドキドキと、心地のよい緊張感と大きな喜びを与えてくれます。また、読んでもらった本をすぐに図書館に借りに行く子や、今まで興味がなかったジャンルの本を手にと取ってくれる子どもたちを目にすると、なものにも代えがたい充実感が得られます。

「オレんじママ」の特徴は、代表者を置かず、中央公民館図書室の司書が、メンバー間や小学校との調整役を担いつつ、切れ目なく長く活動を続けることを目指し、実践できていることです。また、読書好きの個人や小グループが集まって構成されているので、各々が自由なスタイルで活動を展開していることです。仕事を抱えつつ、時間を調整して活動するメンバーが増えてきましたが、本を通して子どもたちとともに過ごす楽しい時間をもち続けられるよう、メンバーの想いをひとつに、これから「オレんじママ」は歩き続けていきます。

絵本サークル きいろいばけつ

代表者 藤本 英子
京都市府読書推進運動協議会
〈推薦〉

始まりは、旧和知町において3つの小学校が統合され、和知小学校がスタートしたころでした。

当時の校長先生が「読み聞かせをしてくれる人はいないだろうか」と言われたことをきっかけに、PTAメンバーが集まりました。その後、地域の絵本好きも加わり、読み聞かせの方法、絵本の選び方、持ち方などを学びあい、約半年後に教室デビューとなりました。

多くのメンバーがフルタイムの仕事を持っていて、朝1時間の休暇を使つての読み聞かせでした。毎回参加できなくても「できる人が、できるときに…」と声をかけあつた緩やかな活動だからこそ、長く続けてこられたと思います。その後、小学校だけでなく、こども園での読み聞かせ、子育て支援センター事業「絵本を楽しもう」の企画運営、図書室での「えほんはともだちおはなし会」を続けていくうちに、新しいメンバーも増

えました。

読み聞かせやおはなし会の準備のために、月1回程度「例会」として集まります。例会では、持ち寄つた絵本の紹介や、新しい本や気になる本の情報交換を行い、そこでは大人の私たちも、読み手の立場だけでなく、読んでもらう感覚や楽しさを味わいながら、絵本を選んでいきます。

今年度は、結成20周年を迎えました。近隣市にお住まいの絵本作家 北川チハルさんを迎え「絵本トークライブ」を開催し、おおぜいの親子さんが笑顔で楽しんでくれました。同時に子どもたちが絵本を自由に楽しむ「絵本のひろば」も開催しました。この日のために



小学校から活動を広げて20周年！

面展台も手作りし、今後さまざまな場で活用していきたいと思つています。

京丹波町に今春、ようやく図書館が設置されました。今後は図書館と連携しながら、私たちが大好きな絵本を、多くの子どもたちに手渡してゆきたいと思つています。そして、これからも「できる人ができるときに…」緩やかに続けていきます。

おっはなし会

代表者 矢野しをり
岡山県津山市
岡山県読書推進運動協議会
〈推薦〉

2001年11月発足。地域の公民館の後押しで始めた読み聞かせの会「ね、おはなしよんで」からスタートしました。発足当初はひとりでしたが、参加者から仲間を募つて3人となり、月2回のおはなし会が始まりました。それとともに、子どもの本をもっと知りたい、絵本を見る目を養いたい、という想いから、月1回の勉強会（絵本ワーク）を始めました。勉強会にはわが子の通う小学校の読み聞かせボランティアや、家庭文

庫を始めたという人たちが加わり、ともに学ぶ仲間が増えていきました。この会員相互の学びあいは、今日まで続けています。公民館での活動は小学生のほか、小さい子のためのおはなし会、絵本の貸出、児童クラブなどへの出前、「夏の夜の怖いお話し会(ストーリーテリング)」などなど、臨機応変に続けてきました。年月とともに参加者の減少などから一部を残し途絶えています。現在は、市立図書館(2004)と市内ふたつの小学校(2005、2010)で定期的に読み聞かせを続けています。図書館では2008年に月例のおはなし会をスタート。集つた子どもたちにあわせて絵本を選べるよう準備し、本の展示・紹介もしています。

小学校では、複数の学年へ学期に1回ずつ、図書の間時間を利用して絵本とストーリーテリングを、他校では毎週1回の朝読書の時間に絵本を読んでいます。いずれも1年間同じ学年に入っているのでも、子どもたちとの信頼関係も深まります。子どもの進級にあわせて持ちあがつていくこともあり、一緒に成長しながら読書を楽しみあう仲間になっていくように感じ



勉強会「絵本ワーク」で学びを深めて実践へ

られます。
読み聞かせの後は、毎回、振り返りをし、活動を記録、子どものつぶやきや表情、空気感などを共有し、次に繋げていきます。

絵本ワークでは、たがいに絵本を読みあい、子どもの見方や気持ちに近づいて聞くことを心がけています。取りあげる絵本は長く読み継がれている絵本や、東京子ども図書館のリストなどから選ぶ読みあうたびに「子どもの本」の奥深さに気づかされています。また、著名な絵本作家や子どもの本の研究者の方々の講演会、ボランティア講座などにも積極的に参加しました。これらの経験は、ことばの大切さや子どもへのまなざし、ボランティアとしての心構えや人としてのあり方までも、考え学ぶことの連続でした。

し、ボランティアとしての心構えや人としてのあり方までも、考え学ぶことの連続でした。会員が子育てをしながらの時期には、仲間同士の小さなおはなし会をしたり、一緒に家庭文庫や図書館めぐりをしたり、自然にふれて遊んだり、子どもの成長とともに、楽しめる絵本や物語の世界も広がっていきました。

最近では、絵本をインターネットで見るという親子もいます。人と人のふれあいの中で、心を育ててくれる本と出会い、その喜びを他者と共有できる。そんな豊かな時間を届ける一助になればと思います。地道に活動を続けたいと思います。

杵築市立図書館 古典文学講座

代表者 栗屋文世
大分県杵築市

〈推薦〉
大分県読書推進運動協議会

「杵築市立図書館 古典文学講座」は、1978年に公民館事業の一環として受講生31名で誕生しました。翌1979年には杵築市立図書館の開館に伴って図書館事業となり、現在にいたる長い歴史を持

つ読書講座です。

1978年度から2023年度まで44年間の長い歴史の中で、のべ受講者数は1237名に上ります。その間、講師の先生も変遷し、現在の先生は第5代目にあたります。図書館の講座なので毎年6月から翌年3月までを区切り受講者を募っていますが、受講生の多くが毎年受講し、なかには四半世紀以上継続している方もいます。講義を年度ごとで区切らず、ひとつの作品が一区切りするまでは新しい作品に移らないので、毎年同じ内容にならず、先生ごとの工夫があるなど、新しい気づきと学びが常にあるせいかもしれません。また、図書館事業として始まる6月より前の4月～5月に、以前から在籍している受講生は3月までの学びが途切れないよう自主的に講座を開催しています。

1978年誕生時の教材『源氏物語』を皮切りに、歌集『新古今和歌集』や日記文学『伊勢物語』など小説以外の文芸作品のほか、江戸時代の俳句集『奥の細道』や歴史物語『大鏡』など、日本の古典文学をジャンルも時代も幅広く取りあげています。今日まで語り継がれている古典文学を味わうには、文語体を読み下すことに加え

て、それぞれの作品の作者が生きた時代背景を理解する必要がありますが、専門的な知識を持つ講師の先生に教授していただきながら名著を読めば、その作品の文学としてのすばらしさを味わえるだけでなく、作品が描かれた時代の政治や信仰や風俗などについての理解も深まり、新しいことを学ぶ喜びも得ることが出来ます。この温故知新の喜びこそが、「古典文学講座」から受講生が途切れない理由かもしれません。

当講座は月に1回の座学が主ですが、大分県内の史跡に直接ふれて歴史への理解を深めることを目的にした現地研修も1年に1回開催

親子・家族と絵本の写真を募集!

■NPOブックスタート写真コンテスト開催

NPOブックスタートは、「いっしょにえほん写真コンテスト2024」を開催、4月22日(月)～5月20日(月)までの期間、公式SNS (Instagram・X・Facebook) で作品を募集すると、発表した。

募集するのは、赤ちゃんや子どもとの絵本のひとときやその思い出の写真と、写真にそえる100字程度のエピソード。大賞には、受賞作をレイアウトしたオリジナル図書カード5000円分と、イラスト

度、実施しています。この場で受講生同士の親睦が深まり、ともに学ぶ仲間が存在が学びのモチベーションとなつていきます。

例年20数人、多いときには40人を超える受講生がいましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で減少し、2021年度以降は残念ながら20名を下回っています。受講生をいかに増やすかが今後の課題です。感染症の流行はまだ完全に収まっていませんが、温故知新古の名著から新しい気づきや学びがあり、学ぶことは楽しいことだと市民のみなさんにお伝えして、新しい仲間を増やすことができればと考えております。

トレターの山口みれいさんによる受賞作品のオリジナルイラストが贈られる。応募方法や選者など、詳細はNPOブックスタート公式サイトで、確認できます。



【上】NPOブックスタート公式QRコード
【右】昨年の大賞は神奈川県大磯町の神奈川大さん

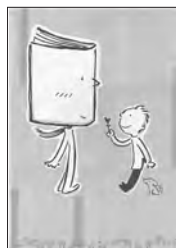
2024・第78回読書週間

ポスターイラスト募集

標語は「この一行に逢いにきた」



2020年
なかいかがおりさん



2022年
たしまさとみさん



2021年
しらいたまもさん



2023年
鈴木初奈さん

秋の「読書週間」のシンボル、ポスターのイラストを募集します。

○賞

- ・大賞（1名）……賞状と賞金10万円
- ・優秀賞（3名）……賞状と賞金1万円
- ・入選（10名前後）……記念品（図書カード）

○応募要項

- ①標語「この一行に逢いにきた」をイメージした未発表の創作原画
- ＊「読書週間」などの文字情報は作品に入れないこと
- ②サイズ B4判、タテ
- ③用紙・画材 自由
- ④CG作品はプリントアウトしたもの
- ⑤カラー、モノクロとも可
- ⑥立体、半立体、写真、コピーは不可

- ⑦応募資格 高校生以上。合作は可だが、応募はひとり1点
- ⑧ハガキ大の用紙に以下を明記し、作品の裏面に添付のこと
- 氏名、郵便番号、住所、電話番号、年齢、職業、メールアドレス（任意）
- ⑨応募締切 6月25日（火）必着
- ⑩送り先・問い合わせ先

- 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-32 出版クラブビル6階
- 公益社団法人 読書推進運動協議会「読書週間ポスターイラスト」係
- Tel 03-52244-5270
- ⑪発表 8月上旬、入賞者に通知
- ⑫入賞作の二次使用権は公益社団法人 読書推進運動協議会に帰属
- ⑬作品は返却しません。ただし、返却希望の方はその旨を明記し、着払い伝票（必要事項記入、ゆうパックに限る）を同封のこと

事務局報告（3月）

- ・4日 伊藤忠記念財団「子ども文庫助成事業贈呈式」出席
- ・6日 伊藤忠記念財団「子ども文庫助成事業」募集要項を順次発送
- ☆6日 絵本図書館ネットワークと打ち合わせ
- ☆7日 機関紙「読書推進運動」676号入稿
- ・7日 〆とたかずひさんと「子ども読書の日」ポスターについて打ち合わせ
- ☆8日 「子どもの読書週間」ポスター出来
- ☆8日 機関紙「読書推進運動」676号責了
- ・12日 第63回全書出版人大会協賛団体打ち合わせ出席（出版クラブ）
- ・13日 上野の森親子ブックフェスタ2024運営委員会打ち合わせ出席（JPIC）
- ☆15日 機関紙「読書推進運動」676号出来
- ・18日 日本児童出版美術家連盟2024年懇親会出席（国立オリンピック記念青少年総合センター）
- ☆19日 クラウドファンディングの件、協業先 CANPHERE 社と打ち合わせ（オンライン）
- ☆25日 2024年度 第1回 常務理事会 会案内郵送
- ・28日 上野の森親子ブックフェスタ2024について台東区文化振興課と打ち合わせ（台東区役所）

編集部&事務局のひとこと

- 国際日本文化研究センター所長 井上章一さんの名著『京都ぎらい』によれば、嵯峨で育った井上さんは、京都市の中心部「洛中」の人々から田舎者扱いをされてきたこととである。嵯峨は「洛外」だろうと。私は嵯峨からさらに山陰線で山中に入った丹波地方の出身だ。上京して45年たつが出身地についての会話にいつも苦労する。
- 「京都府です」というと、「いいですね京都、お寺とか多くて」「いえ京都といっても府下で」「でも京都でしょ」「……」というふうな流れになることが多い。「京都駅から特急で1時間」などと説明するのが面倒で「京都」ということになっておく。これを「洛中のホンマモン」にきかれていたらどうしようと、ハラハラしながら暮らしてきた。
- さて、そんな私は近年は所用もあり京都市を頻繁に訪れる。インバウンドがふたたび活況を呈しているところへ、大河ドラマが吉高由里子さんの紫式部ということでもさらに過熱。ホテル代高騰、地下鉄やバスは常時大混雑、タクシーは圧倒的に不足、一部の観光名所ではもはやまっすぐ歩けない。
- こんなときは無理に出かけず、粹に「読書で京都旅」はいかが？ 京都が舞台の名作は、オールジャンルに数限りなくあるけれど、主人公の青年が北山通に住んでいる、宮本輝さんの『にぎやかな天地』など再読してみようかしら。
- そして私、当協議会に着任して1年が経過いたしました。（佐々木）